
しょうちゃん

ハイキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しょうちやん

【著者名】

N7057N

【作者名】

ハイキ

【あらすじ】

幼い頃、ひとりの青年と出会った。「しょうちやん」は不思議な人だ。この田舎町のことなども知っていて、どこに何があるとか、ここにはどんな誰が住んでいるとか、時々含んだように悪戯っぽい笑みを浮かべながら、全部教えてくれたのだ。

小学四年生の頃まで、母の実家がある田舎町に住んでいた。

実家の近くにアパートを借りていて、そこに三人で暮らしていた。母はその土地に代々ある巫女さんの家系で一人っ子だったため、父のほうが婿入りする形でやつて来たらしい。ちなみに父の仕事は文章書き。あまり大層なものではなくて、雑誌の小さな欄にひつそりと載っているような、ちょっとした仕事ばかりだった。

家族の仲はとても良かつたと思う。今もそうだし、言い合いになつているのなんて一度も見たことがない。父は少し間が抜けているけど温厚な人で、母も優しくていつも笑っている。俺は小さい頃から両親が大好きだった。

一方、俺自身はあまり愛想のいい子どもではなかつた。両親にあんまり大事にされていたせいか、よそに対して恥ずかしがりで引つ込み思案で、人と接するのが苦手だった。特に同じ年ぐらいの子どもからは、無口で俯いていて変な奴だと言われてばかりで、学校に入つても、友だちらしい友だちはひとりもできなかつた。ただ、誘われればついていくし文句も言わないから、いいおもちゃとしてなら、いろんなグループの遊びや探検に参加していたと思う。

ところで俺は、昔から、ふとした時にほんやりしてしまう癖があつた。母と買い物に出かけている時も、学校にいる時も、ほんとうに急にだ。無論友だち（便宜上）と遊んでいる時にも。遊びに誘つてくる友だちの中には、そんな俺を置き去りにしたりしてからかうために誘つているようなやつもいた。

ある日、たぶん二年生の夏休みだつたと思う。いつものように遊びに誘われて、普段遊んでいる広場のむこうにある林までみんなで行つた。リーダー格が「今日はここでかくれんぼをしよう」とか言

つて、なんだかんだあって俺が鬼になったのを覚えている。いつものことだつたから、文句も言わず木に向かつて、数を数える。

数え終わつて顔を上げると、なんとなく違和感があつた。やけに静かで、でも、いつもみたいに俺を置いてどこか別の場所に遊びに行つたんだろうと思つた。それから、せつかくだしひとりで探検でもしてみようと思い立つて、林の中に歩いて行つた。

木がまばらでそれほど生い茂つていらない林だつたせいが、奥まで行つてもずつと明るかつた。俺はなんだかわけもなく楽しくて、どんどん奥まで行つて、もう何時間も歩いていたと思う。今になつてからよく考えてみると、そんなに歩いていたら陽も傾いてくるだろうに。その時はずつと、昼の高い位置にあるままだつた。

道中で拾つた木の枝を振り回したりしながら歩いたりして、そろそろ喉が渴いたなあとか考えていたら、不意にひらけた場所に出た。そこには古くて立派な日本家屋があつて、縁側に誰かが座つて涼んでいる。横にお盆にのつたお茶とお菓子があつて、近づいてみるとその人もこちらに気付いて手招きをしてきた。

「なまえはなんて言つの、どこから来たの」とか聞かれたと思う。俺はその人のことを「しょうちゃん」みたいな感じで呼んでいた。お茶とお菓子が今まで食べたことのない美味しい味がして食べるのに夢中だつたから、会話の内容はあんまり覚えていない。しょうちゃんは白い髪をした男の人で、多分、大学生ぐらいの年齢だつた。立派な日本家屋にひとりで若い男がつていう時点で充分おかしかったが、子どもだつたし、なんの疑問も抱くことはなかつた。じゅうちゃんは博識で、林の中を一緒に歩きながら色々な話を聞いた。普段は引っ込み思案の俺がこんなにもすぐ打ち解けて仲良くなれるなんて、とても珍しいことだ。

それからと言つもの、俺は友だちの誘いを全部断つて、毎日じゅうちゃんのところへ遊びに行くよになつた。じゅうちゃんはいつも

も、あの美味しいお茶とお菓子を用意して待っていて、行くと色々面白い話を聞かせてくれたり、辺りと一緒に散歩したりした。そして家につくのは夕方になつていて、また明日と言われて別れる。

夏休み中そうやって過ごして、学校が始まってからも、放課後や休みの日は必ず遊びに行つた。他の友だちと一緒に遊ぶよりずっと楽しかつたし、ショウちゃんも、俺が来るといつも喜んでくれたからだ。

ショウちゃんと一緒に歩いたり遊びに行つたりする範囲はどんどん広くなつていった。最初は、ずっとあの家にひとりでいたのかと思つていたが、どうやら違うらしい。この田舎町のことはなんでも知つていて、どこに何があるとか、ここにはどんな誰が住んでいるとか、時々含んだよつに悪戯っぽい笑みを浮かべながら、全部教えてくれたのだ。俺もショウちゃんになら何でも話した。親に言いにくい子供の隠し事や、学校であったこと、来る途中で見たもの、俺が俺のことを話す時、ショウちゃんはじつとこちらを見て、興味津々で聞いてくれていた。特に、学校のことにはとても興味があるみたいだつたから、何度か学校の前まで連れて行つたこともある。

そのうち、四年生に上がる頃になると、ショウちゃん自ら俺の登下校についてくるようになつた。朝は家の前で待つていて、下校する頃になると校門の前で待つていて、誰も気にしていないみたいだつたから俺も気にしないことにして、そんなことより、いつでも楽しい話をしながら登下校するのが楽しくて仕方がなかつた。母は俺が前より明るくなつたのに気付いて、とても嬉しそうにしていたのを覚えている。俺自身も、その頃はひとりでぼんやりすることが少なくなつたような気がしていた。

それから半年も経たない内に、家の都合で転校することが決まつた。親戚の家に巫女さんを継げる人ができたから、県外に行つても良いことになつたのだ。前々から引つ越すかも知れないと両親から

聞かれていたし、俺も学校には友だちがないのでいつでもいいと言っていた。だけどしょうちゃんはどうなるんだろうか。県外では毎日のように会いに行けなくなるだらうし、ちやんと知らせなければいけない。

しかし、そのことを伝えようとした日に限って、朝も帰りもしょうちやんの姿が見えない。家に戻つてみてもいない。俺は母に事情を話して（この時初めて人にしょうちやんのことを明かしたが、母は家柄もあって少しも訝しがつたりしなかつた）、母とふたりで手土産を持って話をしに行くことにした。

薄暗くなつていく中、急ぎ足で林の中を進む。

やつと林を抜けた時、睡然とした。林の中のひらけた場所に、しょうちやんの家があるはずだ。でもそこにあったのは、小さな石碑だけ。場所を間違えたんじゃないか？でも、何度も通つた道だ。ありえない。混乱して母の顔を見上げると、母は困つたように笑つて俺を見た。本当に、ここにあつたんだ！信じてもらえないんじやないかと思つて必死に弁解しようとしていると、母が石碑のところまで行つて「息子がお世話になりました」みたいなことを言いながら、持ってきた手土産をその石碑の前に置いた。不思議に思つて見ていたが、その口はそのまま連れられて家に帰つた。

間もなく俺は、両親に連れられて少し都会のほうへ移り住んだ。転入先の学校では少ないながらもそれなりに友だちができる、しょうちやんのことも少しづつ忘れていった。

それから何年も経つてつい最近、ふとしたきっかけでショックを受けたことを思い出した。

俺は小学校を卒業してからも平凡に育つて、大学に行って、親元を離れて、職について、結婚して子ども産めた。妻とは些細なすれ違いで離婚して、小学二年生になる息子とふたりで暮らし始めた頃のことだ。息子はよく外で遊ぶ活発な子供だったが、時々学校の帰りなんかに不思議な絵を描いてみせる。それは白っぽい猫の絵で、息子はその猫を「ショウちゃん」と呼んで俺を見せた。最初こそ、なにかひつかかるようなものがある感じがしていただけで、近所の猫だろうかと思っていた。しかし、何度かその絵を見て記憶を辿るうちに、やっと思い出したのだ。

急いで実家の母に電話をした。「ショウちゃん」とは一体何だつたのか。どうして何も知らないはずの息子が知っているのか。なぜ今まで俺は、こんなことを忘れていたのか。

聞いた話によると、あの石碑は魂をまもる神さまの家として祀つているものだつたらしい。魂という言葉は生き物の知性なんかも指していて、地元では「博学多識で聰明な神さま」として伝えられているんだとか。とにかく、それが「ショウちゃん」の本当の姿なんだ。

そしてショウちゃんの一片が俺の魂に（まるで守護霊のように）憑いてきて、血の繋がっている息子にはそれが見えるんじゃないかな。というようなことを母は言っていた。

確かにあの時以来、子供心にあつたなにか不安なものがすっかり無くなつて、軽やかだつたような気がするし、実はずつと近くにいたというのは、納得できる話だった。（でなければ結婚して子どもができるなんてのも、奇跡に近かつたと思つ。生憎考えの違いから離婚してしまつたが）

近い機会に、息子を連れて母の実家のほうへ行つてみようと思つてゐる。あの林の中を歩いて、小さな石碑の前にお供え物をしに行く。そして、息子ともどうか仲良くやつてくれと言つつもりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057n/>

しょうちゃん

2010年10月10日06時40分発行